

【2018年産のひやくまん穀の反省点】

- (1) 移植後の低温や植傷（深水管理等）による穂数不足・一穂粒数の過剰
- (2) 登熟期の日照不足による登熟歩合の低下（特に遅い移植で）
- (3) 2018年産は収量・品質が低下し、個々のバラつきが大きい

対策

安定生産に向けて「土づくり」と「5月上旬田植え」

1 土づくり

- (1) 収穫後～代掻き前までに土づくりを行う。

土づくり資材の施用量 120kg/10a

※ケイ酸分20%の資材の場合、従来の施用量より
20kg多く施用すれば、4kgのケイ酸を多く補給可能

- (2) 作土層15cm以上確保するように耕起を行う。

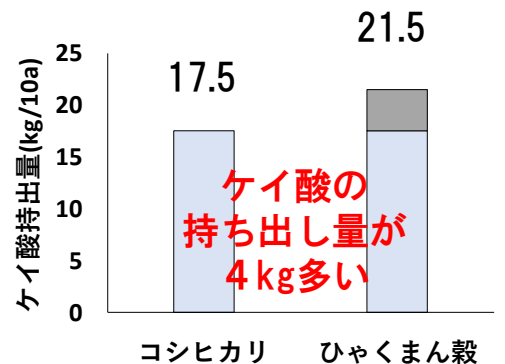


図 収穫によるケイ酸持ち出し量

2 育苗計画： 5月上旬に田植えをする！！

項 目	一	般	移	植
田植え時期	5/1	5/5		5/10
浸種 10℃×10日	3/25～4/4	4/1～4/11		4/8～4/18
催 芽 2 日	4/4～4/6	4/11～4/13		4/18～4/20
播 種	4/6	4/13		4/20
出 芽 2.5 日	4/6～4/9	4/13～4/16		4/20～4/23
ハウス管理	4/9～5/1	4/16～5/5		4/23～5/10
播種～田植	2 5 日間	2 2 日間		2 0 日間

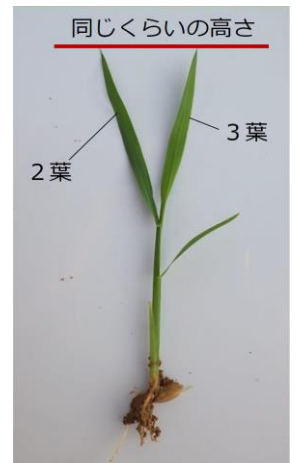


図 適期の苗

老化苗にならないように注意！

中苗(4葉がみえている)になってしまうと分けつの発生が遅くなり、必要な穂数が確保できません。

3 消毒

消毒の方法（農薬等）	処理方法
テクリードCフロアブル	希釈倍数200倍 24時間浸種 ※消毒液の温度は10℃以下にしない
湯温消毒	60℃ 10分間

4 浸種： 積算温度（水温×浸漬日数） 100℃

品 種	水温 10℃	水温 15℃
ひやくまん穀	10日間	7日間

※種子消毒の期間も浸種に含みます。

種籾発芽向上ポイント

- ① 浸積水量は種子籾の2倍以上（籾1キロに対して水2～3リットル）
- ② 浸積当初の水温は10℃以上を必ず確保する
- ③ 可能な限りにまめに水の入れ替えをする

5 催芽（加温出芽）： 発芽を揃える

催芽適温	催芽程度	期間	注意事項
30℃	1～2mm ※ハトむね程度	2日程度	伸ばしすぎによる芽、根の損傷は出芽ムラの原因となる

6 播種

ひやくまん穀の籾重は、コシヒカリと比べて約2割重いため、コシヒカリの播種量より 2割多くする必要がある。

1箱あたりの播種量 乾籾重 145g



図 ひやくまん穀の苗

7 出芽

出芽の程度	出芽日数	温度管理
芽の長さが8～12mm	2～3日程度	30℃

8 育苗： 育苗期間は1か月以内！

ハウス内の温度管理、水管理はコシヒカリと同様に行う。

9 田植え： 5月上旬に田植えをする

(1)耕起、代掻き、雑草防除

作土層15cm以上確保するように耕起し、コシヒカリと同様に行う。

(2)病虫害防除

苗箱施箱は、紋枯病に効果のある薬剤を施用する。

(3)田植え時期

①穂数確保、②登熟期間の日射量確保のため、5月上旬に田植えをする。
田植えが遅くなると出穂期が遅くなり、収量、品質の低下を招きます。

田植え	出穂期	刈取適期
5 / 1	8 / 4	9 / 1 5 ~ 9 / 1 9
5 / 5	8 / 4	9 / 1 5 ~ 9 / 1 9
5 / 1 0	8 / 8	9 / 2 0 ~ 9 / 2 4

※出穂期、刈取適期は、田植え後や登熟期間の気温の推移によって前後する。

(4)栽植密度

収量・品質の安定に向けて、穂数をしっかりと確保するため、60株/坪 以上にする。

(5)施肥 適正な施肥量を守る

施肥量は、窒素量でコシヒカリ + 3 kg/10a とする。

肥料名	施肥量 (kg/10a)		
	平坦地	低地力田	高地力田
ひやくまん穀 専用一発くん	3 5	4 0	3 0

※保証成分(%) N-P-K＝ 28(基肥：5.5、穂肥22.5)－ 8 － 8

問い合わせ先 J A O O （電話：〇〇〇-〇〇〇〇）
南加賀農林総合事務所農業振興部（電話：0761－23－1703）
加賀農林総合事務所（電話：0761－72－8511）